月令

へ5
6543

はた井ゟ聞え又れ白雲とて伊丹の
叟か筆端を紙細か書きて下さるの
うちあらしきへのかゝみをまへりと
するハ六かしきれくするものとものゝまゝや
侍らんとて此数の風雅を光又出写
の尾張ありて世に集とし文のよそして
をかしかりし 句額二巻上句て館あ

尾陽蓬左文庫
杉安蔵書
へ5
6543
010186021997

ちとせたくへりかれぬまさらんかきとらし
此度取扱室幼日上大祥少祥忌騰
て鞭するなりめしとてしりてさま此
里母より言あれとも一家の里田此よ
あらめをとあるとも番
明治己亥夏　三河　石九之

ちらくとむしろ月や山の上　雪ね
揺む田あまたつありし風　は蝌
更れ秋公蕭清きさの野し　、
こしは視くくものつよけり　ね
ひね魚も揺ぞしきふ緒垂　、
はさつのきれきさつらまるせ　蛸

やうを見れば、秋ごとに、
あらたまる年を待つ神
なれば、
後の世とかなふ方さたなきて、
ものを見て、
まことの世を浄るかうを
なれば、
見るにつけ、一さい
物
たかが俗の世を辺り
なれば、
七夕の日斜なる
物

俗間の物ものうて高くら
なれば、
歌とやつてゐる粥餅
物
日代りの芳野の宮よりなれば
なれば、
年を見れば世のあるうち
物
見れば銭の銭
なれば、
つらつらの物を求しさめて
物
吉の思ひ引かのそこの物三里
なれば、
この翁よりまた角の長
物

うらみてそうす　袖のやり　変
　　ハ
　　除へてそうる　面白形屏
　　ね
きくそうも本性の言いつもかも
　　御
屋敷をハ　とも　敬　そう
　　ね
飛書の書の　敬　書つけて
　　御
ほうるるるかと　続　ておく　中
　　ね
御　稚　と　大　り　夢の水　合
　　御
袖　唐　そ　く　是　条　ハ　そ　う
　　ね

そうるる　彩　嶋　条　ま　ま　ま　き
　　御
門　か　ら　外　ハ　そ　う　そ　ひ　ぬ
　　ね
法　鋼　そ　条　ね　て　故　鋼　と　上　う　ま　ま
　　御
車　ハ　そ　て　ひ　う　く　そ　と　載
　　ね
そ　ひ　の　鋼　み　ま　そ　う　緩　そ　う
　　御
明　ま　ま　そ　る　ま　の　ち　う　先
　　ね
尼　達　の　ま　そ　敬　り　袴　ひ　う
　　御
元　尝　自　陽　丸　姫　の　そ　ま　ひ　く
　　ね

金屏にたらみそめしてて　海
暮日のおとろさめる大海　同
頃刻つの波ゝあてかけまう　海
あらう迄ゝ波の時のとゝる　同
日みしゝよりまく亜の松嚴繪　海
埼偉なるさ形一望岩　同
材沢ゝ沢長沢のまゝ也　海
ゝ今をしてもきれぬ利力　同

自然ゝ清うねて　海
かまみ形ゝくてる影ゝ　同
むく迄ゝまでゝうゝ澄ゝ　海
朝ゝ月てゝ　同
鶏鳴（こけ）北時ゝ山ゝ　、
蒸てゝ山の日ゝ　海
てゝゝと雲の地ゝ　同
つもみゝ山て松ゝ　海

あらそつてねし歌もちつともや　ね
是は何月子歌もらるゝ事す　州
清見が関にて仕舞し出坊主清　ね
哥をよみても加様迷惑　州
悪らつは智恵をも文殊もみやすし　ね
年さへ取れば昔の古事も　州
也れよ茶をいつちよつとひとわけら　ね
宿むらしと人を得る　州

末の身に猿のこしけ様して　ね
傍らへつゝあまる柄の糸　州
三ウ
あいらしき古き能あと来し縁た史　ね
五人洩とそ咲てをいら　州
燭対すらつふさきすの恨　ね
ところ風をふるに往ら手　州
夕ぎくの花極よ聴ひおとろまる　ね
しつと水きて居しぬを見る　州

ちはやぶる神かんとのゝうちにて
ぬれぬる袖をあらしふく君
片くゝあるうちにあられはてゝ
雲もとゞまらしわくる事ちかし
あれはてゝ月のみ
裏くしれ月をかゝ
清泡してあらぬ中きかの方丈記
雲庵の閑しかつ隠ゝ

ね
ね
ね
ね
ね
ね
ね
ね

十九

つゝくゝとあるものを菓子のつくりあ
雲入者は
百足はちゝ
吹の鍋
小舟をいとう
仏高橋
味噌好きくゝ
雲うちする海を
ね
ね
ね
ね
ね
ね
ね
ね

もんてんのちよりも
ひとりうさぎ　飯盛
きるほどとなるは角板よりひくく
紀州の産れ　産する日
色おろうまんて陣ちちちと
ちちちは兵ちちけり
はして大量流さるのはまと
よりぬらきまれうるる石

九月三日の不二をたて
はるかに　紀の鶴る
ちーの鶴のぬてくるる
上つて見れいちじまする
ちうとうぬちをうの
右ちも見えちらの花

[illegible]　同
[illegible]　塚
[illegible]　同
[illegible]　塚
[illegible]　同
[illegible]　塚

[illegible]　同
[illegible]　塚
[illegible]　同
[illegible]　塚
[illegible]　同
[illegible]　塚
[illegible]　同
[illegible]　塚

はるかに云ふて俤ちの昭ことさよ　ね

みそぢの市繁さもあらんはれ　梅

ひしてふ水指ゑ月のはうて　ね

ちまきて雲のあらきさよ桜　梅

下事をさめれい冷とゆるむらん　ね

たきれの部の笛をとあつる　梅

とのもも梅のまたかつて垂し　ね

あるはてらくをとゝ落也　梅

[illegible]

ゑもゝ樹よりつゝて鍋とめうう　ね

筏巻ふくの雲葉あるそ　ね

池畑の形のよゝ[illegible]古沢文　梅

祇園ふくるも花のあるを絵　ね

明るも角をさゝれ迷のうね　梅

ひろい部ふにしも落葉　ね

なるんてもぞれぬ涙と駕拭て　梅

金ちゝ解あるる雲雨　ね

夏のてる日の暑さにたへかねて　塚
梅雨をまつるるまもなく　ね
おもひおもひ人を恋ふるあらしかな　塚
鼓をもてもてさしうつる月　ね
陽炎のうつるうつる春の糸　塚
白かうつぬる雨糸　ね
三
ひう作れ作るるこなる小石　塚
水ぐるのかく鼓のやうに　ね

ぬるうる春の水をうねうねして　塚
水を春る蛇の夜ぐるる　ね
あさまだきの春の夜中一文字　塚
何ともいふ春をと指さしに　ね
蛙ひの つるるて 蛙の ひるうと　塚
春の菊ものの 松うるく　ね
春の菊の双鼓ちかうる月　塚
蛙ものみる風 いとしむて　ね

たちくらべ現世のうくるものむつかしく　栞
見やかぶるの体の俗重　ね
傳うるかたちをかきれうしろめ　栞
ちちうちくしてをぼむめう　ね
なるなるこひろめるこひろめる庇石　〃
鞍よりくくあめをを　栞
可今の雲と器よ味重焼て　ね
ちち屋の鞍を持こてる俗　栞

杉菌をくつろうおろよ苔つつ　ね
誰とまを使をとるの人筆　栞
うらみきく耳のいつる線紙よ米　ね
人をよ方の屋よりを俗　栞
まを屋の二をよる藝屋俗　ね
三百年　板蔵作り　栞
母の堂よ堂の茶釜をふをを　ね
ちうい砂よ作ををるる　栞

仰ぎてそれぞれ野言し　ね
思ひ入れぬ者旅寝　楪
つくづくかさねくし恋　ね
よみたるふるさとの見　楪
俳界めくらたとる解の頑やて　ね
本俳めりけるすぶち　楪
情と夢と描ふるかし　ね
極意よつてあらるる　楪

と一宮の宮司の門弟　ね
あるとつぶぬ人はそしけ　楪
ものとしてる部ろかて　ね
四まうあるる草汁　楪
十号の高ぬ冷仲習　ね
陸氣ともむ古地月　楪
さくもからけ除る残念　ね
雲北ぬ雨氣ぬ冬ら　楪

とかくして拾社の作回もうて

を理てをれよ宮の屋敷

鄙ふりぬよ的海に夕ぐれて　　柴

乾飯ひらすよ水をうめる　　ね

大海の海の奇うるわし乳　　柴

印月まうよ杉の葉伝　　ね

降うれ雪の梅より来雪から　　柴

人賢くうい隙うるる　　ね

引まつの大風うぬくれうら　　柴

うつう飾る鶴角吐せす　　ね

神重ら家皆れ人隙の勝　　柴

泉雪かくて沼光りたも　　ね

彩の月林本を遠れ雪　　柴

ふるし梅をうるぬう飯　　ね

なう

女よ妻ら家れふうを小ひより　　柴

祇園ふるん七年世ふるる　　ね

おなじ役にてめられ　傑
あとにてすめる事の譜　同
人をしらるゝ事　傑
子をもつ親の心　同
吉の色に吉あるとよさ　傑
母おもひのあり　同

富田藏書